

観光地情報

2020年1月より
麒麟がくる ぎふ可児
大河ドラマ館開館！



花フェスタ記念公園

約7千品種3万株のバラが植えられた世界最大級のバラ園。春と秋のバラの季節には多くの人でにぎわいます。ネモフィラ(3~4月)、ひまわり(7~8月)、コスモス(9月)など、一年を通して様々な花を楽しむことができる公園です。

住所 可児市瀬田1584-1
電話 0574-63-7373
料金 大人520円(バラまつり期間中1,000円)
高校生以下無料
時間 9時~17時(季節により変更有)
休み 火曜日、年末年始(バラまつり期間中無休)
(2019年8月1日現在)

天龍寺



明智氏歴代の墓所があり、本堂には日本一大きい
明智光秀の位牌(184cm)が納められています。

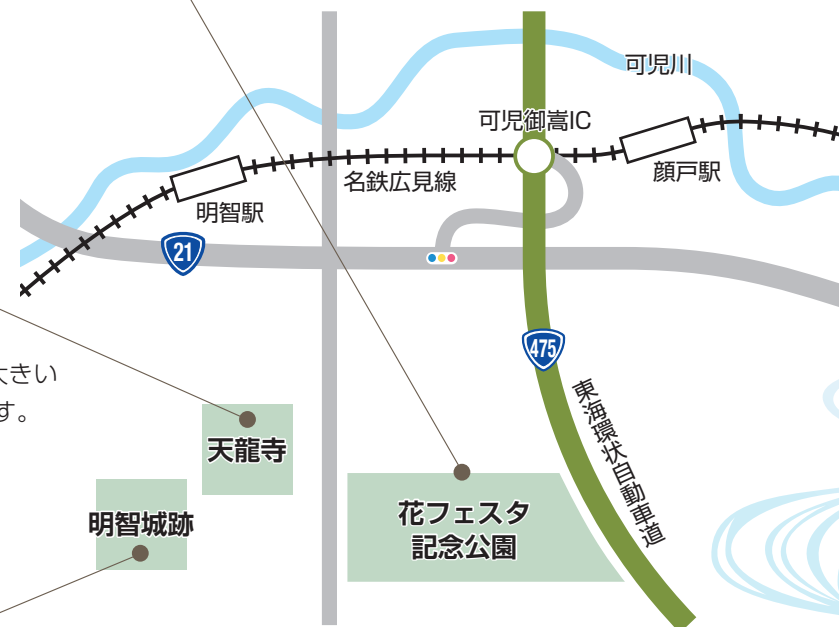
住所 可児市瀬田1242
電話 0574-62-1859



明智城跡

明智光秀が生まれてから約30年間過ごした城と伝えられる。

住所 可児市瀬田1238-3
電話 0574-50-7056(観光協会)



可児市で語り継がれる 明智光秀物語



大河ドラマの世界を体感！



明智光秀の生涯を追う
VRゲームで光秀相手に腕だめし!!



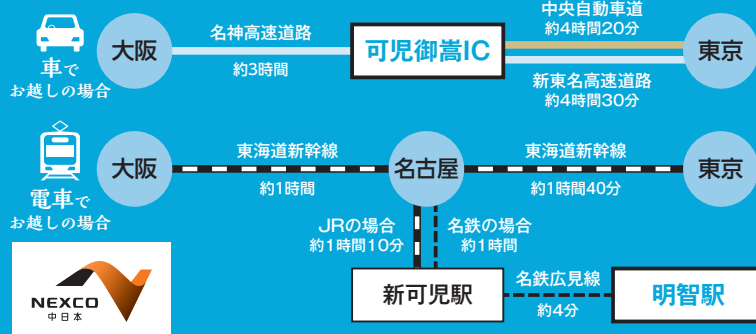
戦国時代を食べまくれ!
買いまくれ!



戦国時代を楽しもう!
イベント盛りだくさん★

明智光秀博覧会2020 in 可児市 入場料無料(大河ドラマ館のみ有料)

交通アクセス



問い合わせ

可児市大河ドラマ「麒麟がくる」
活用実行委員会事務局
可児市広見一丁目1番地
(可児市大河ドラマ活用推進室内)
TEL.0574-62-1111
ホームページ
<https://akechimitsuhide.com>

光秀生誕の地PR
可児市公式サイト
要チェック!



麒麟がくる ぎふ可児 大河ドラマ館開館!!

開館期間
2020年1月11日▶2021年1月11日
9:00~17:00

開館場所
花フェスタ記念公園花のミュージアム(可児市瀬田1584-1)
入場料 大人500円 小中高生200円

可児から雄飛した麒麟児 明智光秀

可児市で生まれたと伝えられる戦国武将・明智光秀。かつては「謀反人」や「逆臣」といった印象が強い人物でしたが、近年はそのイメージの見直しが進んでいます。

優れた政治能力、重要な戦さを遂行できる軍事的力量によって、織田政権の白眉として評価される一方、家臣を思いやる優しさや、高い文化的素養を兼ね備えていたことも注目されています。

ここでは、天下へと雄飛していった麒麟児と可児市との縁について紹介します。

【土岐氏と明智光秀】

明智光秀の前半生についてはほとんど分かっておらず、謎が多い人物です。その出自については諸説がありますが、通説では土岐氏の流れをくむ「土岐明智氏」の一族であるといわれています。

土岐氏とは摂津源氏・源頼光の子孫のうち、美濃に土着した一族である土岐光衡を実質的な祖とし、美濃国土岐郡を本拠とした氏族であり、美濃国(岐阜県南部)の守護として、時には国政に大きな影響を与えるほどの力を持ちました。土岐氏は「桔梗一揆」と呼ばれる強力な結びつきによって団結しており、そのトレードマークは桔梗紋でした。土岐氏の家紋である桔梗は、明智光秀の使用した紋であったともいわれます。

『美濃国諸旧記』※1によれば、康永元年(1342)に土岐頼兼が、美濃国明智荘(明知荘)に城を築いて居城とし、以降「明智」の名字を名乗るようになったとされます。この一族が土岐明智氏であり、明智光秀の一族であると考えられるのです。



明智光秀肖像(本徳寺蔵)

【明智荘と明智氏】

土岐明智氏発祥の地とされる可児郡の明智荘は、現在の可児市北東部から御嵩町西部にかけて存在した荘園で、古くは「明知八郷」と称される地域でした。

明智光秀の生まれた時代に土岐明智氏が明智荘一円に勢力を誇っていたという確実な史料は見つかっていませんが、『美濃国諸旧記』では初代の土岐頼兼より光秀に至るまで、代々可児郡の明智荘に土岐明智氏が住んだとしています。現在、瀬田地区の狭い地域に寺院が集中していることや、「東屋敷」「西屋敷」「大屋敷」などの地名が残ることから、有力な武士層の存在をうかがわせるという説もあります。

瀬田の青龍山天龍寺には「明智氏歴代の墓所」とされる石造物群があり、宝きょう印塔や五

輪塔が並んでいます。天龍寺には、日本一大きな明智光秀の位牌も祀られており、明智一族とかかわりが深い寺院として、例年6月には「光秀供養祭」を行っています。

東海環状自動車の可児御嵩ICを降りると、そこは往古の明智荘の領域です。昔は一面の田園地帯であり、可児郡の米どころでもありました。大河ドラマ館が開設される予定の県営の花フェスタ記念公園も、何かの縁でしょうか、明智荘の領域内にあります。



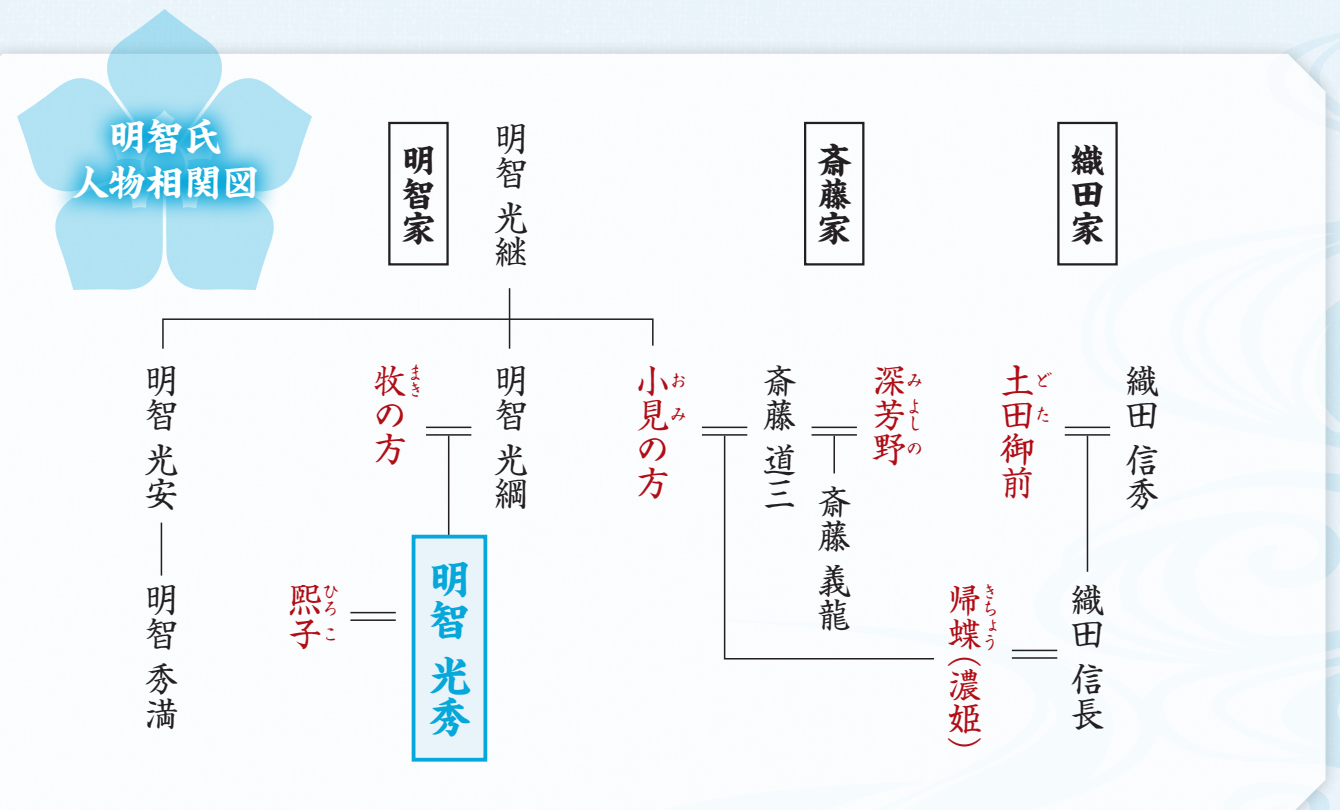
現在の明智荘一帯の展望



(伝)明智氏歴代の墓所(天龍寺)

【光秀誕生】

明智光秀は享禄元年(1528)※2に、可児郡明智荘で生まれました※3。『美濃国諸旧記』では、父は明智城主の明智光綱、母は大野郡府内(現在の揖斐川町)を本拠とした山岸氏の娘であったとしています。



同書によると、光秀の叔母にあたる女性が斎藤道三の妻(小見の方)であり、その子が「帰蝶(濃姫)」だとしています。織田信長の正室として知られる濃姫と光秀とは「いとこ同士」という関係だったことになります。また、当時の美濃国の支配者である斎藤道三とも姻戚関係にある、東美濃の有力な一族としての明智氏の姿が浮かび上がります。

光秀が後に示すことになる知識・教養、そして人脈の土台は、明智一族の跡継ぎに相応しい武士(もののふ)として、可児で育てられたことによるのかもしれません。

光秀が明智荘のどこで生まれたかははっきりしませんが、瀬田地区字浦田の瀬田川付近には、明智光秀の産湯の井戸があったと伝わります。昭和40年代の土地改良以前は、ややこんもりとした茂みの一画に、井戸跡とされる場所が残っていたといいます。

明智光秀エピソード

— 鉄砲名人 光秀 —

『明智軍記』には光秀が越前の朝倉義景の前で鉄砲の腕前を披露した話がみられます。

この時、光秀は45メートル先にある30センチ四方の的に、100発の弾丸を放ち、中心に68発、残りの32発も的に当てたとしています。まさに百発百中の腕前であり、見物していた人は皆驚いたと記されています。当時の鉄砲の命中精度から考えると、俄かには信じがたい逸話ですが、最新の兵器といえる鉄砲の技術に光秀が目をつけていたことは感じ取れます。

同書によると光秀はこの頃、奥州伊達氏、越後上杉氏、甲州武田氏、南は薩摩島津氏に至るまで日本全国を修行のため廻っていたとしています。歴史ドラマであれば、後の群雄たちとそこで知り合い、交流があったと描写すれば面白い展開になりますが、果たしてどうでしょうか？



【道三と若き光秀】

『美濃国諸旧記』によると、光秀は早くに父・光綱を失っています。その後は叔父の明智光安らの庇護のもとに、弘治2年(1556)の落城まで明智城で暮らしたと記されています。明智氏は一貫して斎藤道三にくみしていたようであり、同書には道三が「明智の家を、一方の楯ともなすの心なれば」(道三は明智一族を自分の楯と思うほどに信任していた)」と書かれています。

道三が頼りにしていた明智一族。想像を逞しくすれば、若き光秀は「美濃のママシ」として知られた戦国の雄、斎藤道三の薫陶を受けて育ったのかもしれません。そこで若き帰蝶(濃姫)との交流があったと想像するのも面白いでしょう。「道三流」の処方箋が光秀に受け継がれ、後の光秀に影響を与えているとしたら？歴史のロマンではありますが、いかがでしょうか。

同書では、若き光秀は「生まれつき凡人とは違って、幼少の頃から大志があるようであった」としており、明智氏の所領や家督に興味を示さず、城を叔父の光安に任せておいて、武術鍛

錬のために諸方を遍歴していたと書かれています。いわゆる光秀の武者修行の逸話ですが、このような城主の息子は当時としては型破りといえるでしょう。様々なことに興味を示す、才気煥発な若き光秀像は魅力的ではあります。

このような可児における若き光秀の日々も、終わりを告げる時が来ます。美濃国内では斎藤道三とその子・義龍との対立が深まっていたのです。

明智光秀エピソード

— 光秀の大望 —

『名将言行録』に若き光秀が大黒天の木像を拾った話がみられます。拾った大黒天を朝夕拝んでいるのを見たある人が「これはめでたい。この神を拝めば千人の部下を得るといいます。よくよく大切になさってください」と褒めたところ、光秀は「(たったの)千人か」と驚きました。

「凡人でも千人の部下を持つ人は多い。これは出世を願って拝む神ではないな」といって、光秀は大黒天を捨ててしまいました。当時の光秀は漂泊の身であり、拾った仏像を有難がるほど貧しかったのですが、その心には、千人程度を率いる身分では満足しない大望を秘めていたようです。

【道三との別れ、明智城落城す】

弘治元年(1555)冬、斎藤義龍は父・道三に対して挙兵し、親子の対立は美濃国を二分する争いへと発展します。『美濃国諸旧記』によれば、道三に味方する勢力は少なかったとされます。光秀の叔父・明智光安は、今まで道三には明智一族を重んじてもらった恩があるが、義龍にも義があるとして、何れの勢力にも加担しないことを決断します。そして、ただ光秀一人を義龍のもとに遣わしたとしています。

翌弘治2年(1556)4月、斎藤道三は長良川の戦いで討ち取られ、義龍方の勝利で争いに決着がつけました。この際の光秀の動向は不明ですが、その心情は如何ばかりだったでしょうか。

この後、もともと道三方であった明智氏は、苦境に立たされます。光安は義龍への後背を明らかにせず、道三との義理を貫くといった態度をとったため、同年9月にはついに明智城へと戦火が及びます。明智一族は家臣を含め八百人ほどで籠城しますが、衆寡敵せず明智城は義龍方の猛攻に晒され、ついに落城してしまいます※4。

明智光安は自害して果てる前に、若き光秀に対して「落ちて存命なし、明智の家名を立てられ候へ」と、家の再興を託しました。ここに明智一族は嫡子の光秀を除いて滅亡することになったのです。



明智城跡(可児市瀬田)

可児市瀬田の明智城跡には、この際の戦死者を弔ったという七つ塚や、ひそかに村人が建立したという六親眷属幽魂塔ろくしんけんぞくゆうこんとうが残されています。明智城の主郭とされている地点は、現在配水池となっており、旧状はとどめていませんが、東出丸、搦手曲輪からめてくるわ、二の曲輪、三の曲輪、西出丸、乾曲輪と伝わる場所があります。

明智光秀エピソード

— 明智の家臣たち —

『信長公記』によると、本能寺の変の直前に、明智光秀は4人の家臣にその決意を打ち明けたとされます。その4人は明智秀満ひでみつ、明智次右衛門(光忠)みつただ、藤田伝五としみつ、斎藤利三みそ おしろうべ え。この会合には溝尾庄兵衛も加わっていたという史料もあります。この5人はいずれも光秀股肱ここうの臣といえるでしょう。

『美濃国諸旧記』では、明智城落城時に籠城に加わった家臣として、溝尾庄左衛門、三宅式部之助、藤田藤次郎、可児才右衛門、肥田玄蕃げん ぼなどの名がみられます。また、同書では明智秀満、光忠はいずれも光秀のいとこだとしています。溝尾や藤田の名は本能寺の変の頃までみられるため、親子で明智家に仕えていたのかもしれません。これらの家臣は可児近辺出身の可能性がありま

す。また、明智光秀に「可児」姓の人物が仕えていたことは、信頼できる複数の史料にみられるため、確実です。可児姓は極めて珍しい姓であり、その出自はほぼ可児郡に限定されるため、明智光秀が可児と深い関わりを持っていたという証拠とされています。



【可児から天下へ】

明智城から落ちのびた光秀の苦難の日々が始まりました。『美濃国諸旧記』では光秀は母方の在所であった西濃・山岸氏のもとに身を寄せ、そこに妻子を預け、諸国を遍歴したとしています。この時期は、牢人ろうにんとなった光秀の雌伏のときにあたります。

ここに妻子の話が登場するため、明智城落城前の時点で光秀は妻を娶っていたようです。後年、光秀との仲睦まじい逸話で知られる妻木氏の女むすめは、一説には熙子ひろこと呼ばれる人物ですが、本名は不詳です。夫の運命が城主の一族から一介の牢人へと転変するなか、苦楽をともにした「明智が妻」の物語は後世の人たちの心を打ちます。

可児を出ることがなければ、光秀は地方の領主の一族として生涯を終えたかもしれません。しかし一族の衰亡は、天下に麒麟児を解き放つことにもなりました。

雌伏のときを経て、明智光秀が歴史の表舞台に登場するのは永禄11年(1568)、織田信長が上洛する頃となります。当時としては中年にさしかかった年齢となっていた明智光秀。その天下への雄飛が始まる「とき」です。



明智光秀エピソード

— 明智が妻のはなしせむ —

『絵本太閤記』には、光秀がまだ貧しかった時代の話として、妻が美しい黒髪を売り、来客のためのご馳走の費用を工面したというエピソードが語られています。身分のある女性にとって、自らの髪を売るという行為は辛いことだったと思われます。この光秀とその妻のエピソードは、江戸時代には広く知られていたようです。

「月さびよ 明智が妻の 咄せむはなし」は、松尾芭蕉が門弟夫婦の心温かい歓待を受けた際に詠んだ句です。この句の下敷きになっているのは、貧しいなかで一心に夫を支えた明智光秀の妻のエピソードであり、芭蕉の感慨は「月さびよ」の一言に現れています。

「冴え冴えとした月あかりのもとで、月のように優しく光秀を照らした、その妻について、さあ語ろうか」控え目ながら、その芯には強く凛々しいものを秘めた女性像が浮かび上がります。



- ※1 『美濃国諸旧記』は、江戸期に書かれたものであり、史料的な価値については議論があります。
- ※2 明智光秀の生年は『続群書類従』所収「明智系図」によりました。ただしこの系図では光秀は石津郡多羅生まれとしており、父の名は明智光隆となっています。
- ※3 明智光秀の生誕地には、可児市以外に大垣市、恵那市、山県市など諸説があります。
- ※4 明智城落城の記事は『美濃国諸旧記』など後代の史料にしかみえず、実際に行われた戦いかどうかについては議論があります。

【参考文献】

- 黒川真道編『美濃国諸旧記』国史研究会、1915年
- 二木謙一校注『明智軍記』新人物往来社、1995年
- 小和田哲男『明智光秀 つくられた「謀反人」』PHP新書、1998年
- 谷口研語『明智光秀 浪人出身の外様大名の実像』洋泉社歴史新書、2014年
- 小和田哲男ほか『明智光秀の生涯と丹波福知山』福知山市、2017年
- 柴裕之編著『図説 明智光秀』戎光祥出版、2019年